

「都市の風格、岡崎の風景  
～ 中心市街地の活性化を目指して～」

人間環境大学  
教授 石上文正



人間環境大学で社会・文化環境論という講義を担当し、その中で「身体と空間」といった研究もしてまして、今日、ここで岡崎市の空間に関する話をしようと考えています。今日の演題なんですけれども「都市の風格、岡崎の風景」ですが、中に「風」と「風」、2つの「風」があって、私としては洒落てるつもりなんですけれども、少し皆さんにも気づいていただけたかなと思うんですけれども、「風」って何かいいなと思うんですね。最近木曜日のNHKの時代劇で「風の果て」という題のものもあるし、「風」っていうのは日本人にとって何か非常に意味があるというか、何か深いものがあるっていうような感じがしますよね。そのようなことも考え合わせて、「風格」とか「風景」というような言葉を演題に入れて、ちょっと味付けをしたということです。

今日お話することに関してですが、実は私、岡崎市の中心市街地活性化協議会という団体、つまり中心市街地を活性化しようという団体の委員になっているんですけれども、今日の話は、そこで私が提案した一部というか、ほぼ提案した内容なんです。残念ながらこれは絵に描いた餅で、委員の皆さんの支持を得られなかったんですね。じゃあ何のために皆さんにそういうお話をするかというと、平成19年のこういった時に、こういったことを考えた人間がいるということを皆さんの心の中に残しておきたいということと、それからもう一つ、都市とは何かという、都市そのものの定義について提案したいという願いからです。都市の定義は、非常に曖昧なんです。後からまたお話しするんですけれども、私なりにここで新しい定義を皆さんにお見せしようと思っています。ですから岡崎の中心市街地の活性化という非常にローカルで具体的な話と、都市とは何かという非常に抽象的な話もすることになります。皆さんのお手元にハンドアウトというかレジュメみたいなものをお配りしてありますので、それをもとにしながら話していきます。時々私、眼鏡を外したり掛けたりするんですけれども、老眼のせいなのであしからず。皆様はそういうことはよくご存知じゃないかなと思いますが、若い人は意外と知らないんですよ。何であの先生、眼鏡取ったりはめたりするのかと。失礼しました。

## 1. 「都市」の消滅

『都市』の消滅」と、過激なタイトルがまず第1章にあるんですけれども、都市というのは私の考えでは消滅しつつある、無くなりつつあります。そこに「1.1」として『岡崎市』は希薄化しつつある。副タイトルとし「中心市街地の『中心性』の消滅」、  
「1.2」には、「岡崎市の中心性・象徴性の希薄化」とありますが、これは実は全然違うレベルの話で、そこをまず頭に入れてから聴いていただきたいんですね。上の「1.1」は、中心市街地が、つまりこの辺でいうと松坂屋もそうだし、康生地区が岡崎でいうといわゆる中心市街地ということになると思うんですね。そこが希薄化しつつある、消滅

しつつあるということなんです。「1.2」は、岡崎市っていう都市、岡崎市という都市そのものが消滅しつつあると、そういう二つのレベルですね。中心市街地というローカル場所の消滅と、岡崎という市全体の消滅ということなんです。

もちろん皆さん、私も実際の岡崎市が消滅しているなんて思っていないんです。つまりただ岡崎市という行政区域というのは消滅していませんよね。それから中心市街地は残っていて、空間的にもある。そういう意味じゃあ消滅していません。ただ考え方によってはもう消滅しつつあるんじゃないかという、そういう話なんです。私は過激な言葉が好きなんです。「1.1」の\*印のところには、岡崎市の中心市街地が提供しているものは何かということを示しています。昔は買い物ですよ。今日、この講演の会場の松坂屋は、30年前ここにいなかったの知りませんが、おそらく30年ぐらい前はすごく賑やかで、「康生に行く」といったら、イコール松坂屋へ行くというそんな感じじゃなかったかと思うんですね。私は静岡県の島田というところで生まれたんですけども、静岡市にも松坂屋があるんです。だから静岡に行くといったら、それはイコール松坂屋に行くことなんです。というふうに中心都市には、そこに大きなデパートがあって、そこが買い物の中心だったということなんです。ところが今皆さんご存知のように、車社会になって、ショッピングセンターがいろんな所にできてるわけですね。ですから今のこういったショッピングセンターが成立するのは車社会だということだと思います。車があれば、別に松坂屋に行かなくてもショッピングセンターに行って、買い物ができるわけです。

実は私は豊田市の南の方に住んでいるんです。岡崎市民じゃないんですけども、豊田の南の方に住んでも買い物はどこに行くかという安城なんですね。皆さんは、大体の人が、多分ここに集まっている人は岡崎学を勉強しようというから筋金入りの岡崎市民ですから、多分岡崎で買物をなさると思うんですけども。私は残念ながら筋金入りの豊田市民じゃないものですから、あちこち浮気が多いんですね。だから買い物は安城ということになっているんですね。ということは、豊田市もある意味では消滅しつつあるし、岡崎の中心市街地も消滅しつつあると、買い物のレベルでは言えると思います。それから中心市街地では、多くの行政サービスを受けることができます。豊田では、例えば住民票だとか、印鑑証明とか、そういうのは取る時は、市役所ではなく、コミュニティセンターに行けば取れるんですね。岡崎もそうなっているんでしょうかね。別に市役所に行かなくても地域のそういうコミュニティセンターとか、何か近場の所に行けば取れるわけです。つまりもう市役所に行かなくていいんです。豊田は少なくともそうなっています。多分岡崎もそうなっているんじゃないかと思うんです。それからその他のサービス、例えば病院なんかそうですよね。何で市民病院が、山の方に移ったんでしょうか。多分、市街地に必要だと思う人がたくさんいると思うんですけども、遠くに行っちゃいましたよね。そういった様々なサービスが、中心市街地からどんどん無くなってしまっているということだと思うんです。職場もそうでしょう。岡崎の中心市街地で働いている人が必ずしも岡崎市民じゃなくて名古屋から来ているかもしれないし、支店がたくさんありますので、そういった支店は東京の人が単身赴任でこちらに来ているかもしれないでしょう。そういった様々なことを考えると、中心市街地は消滅し

つつあるのではないかということなんです。

それから「1.2」に『岡崎市』は希薄化しつつある 他の都市との差別化という次元で」とあります。ここがちょっと分かりにくいかもしれませんが、都市っていうのは、後から喋るかもしれませんが、都市と田舎があって、田舎から見ると都市なんですね。都市と田舎っていうのがあるから都市があるんです。例えば男と女の例で考えましょう。この世の全部が男だったら男の意味があるかってことです。全然意味なくなっちゃうんですね。女がいるから男に意味があるし、男がいるから女に意味がある。同じように、クラスで1番の人があるのは40番の人、ピリの人があるから1番の意味があるんです。全部1番ということはありませんということなんです。ですから都市が存在するのは周りが田舎であるから都市が存在するということなんです。日本は都市化が進行しているし、特にこの愛知県というのはほとんど都市ばかりですよ。つまり、豊田も安城も豊橋もみんなある意味ではかなりレベルの高い、日本でも繁栄している都市だと思うんですね。そんな中でそれじゃあ岡崎というのは意味があるのかというと、はっきり言ってあんまり意味はなくなってきているんじゃないか。他の所と同じなんだ、ということだと思うんですね。そういった意味で都市そのもの、つまり岡崎そのものも意味がなくなってきているということなんです。それは、岡崎市というものの中心性というか、他の田舎との関係で中心性とか象徴性というのがなくなってきたということだと思うんです。ということは岡崎市民という市民意識も、この人は別だと思うんですけども、かなり薄れてきているんじゃないかなと思うんです。名古屋に通うのに岡崎が便利で、居住環境もよいので、岡崎でマンションを買って、そこから名古屋に行くといったこともおこっていると思うんです。そうすると、岡崎っていう市そのもののアイデンティティというか、岡崎市らしさというのは薄れてきているんじゃないかと思うわけです。そういった市民意識も薄れてきているんじゃないかという意味で、岡崎市が希薄化しつつあるということなんです。

この辺で、もし都市らしい都市というと、やっぱり名古屋ではないでしょうか。名古屋があってその他の都市という、そういったような関係が今あって、昔は違うみたいですね。尾張と三河という関係があって、しっかりした三河の存在感があったと思うんですね。ところが今残念ながら名古屋に一極集中化していて、岡崎の相対的な地盤沈下がおこっていると思うんですね。そういった意味でも岡崎市というのは希薄化しつつあるというふうに考えています。ハンドアウトの「1.3」のところをご覧ください。「地方空間の平板化 『都市』の消滅」とあります。つまり岡崎市だけが消滅しているわけではなくて、ほとんどの都市、中小の都市が消滅しつつあって、残っているのは例えば北海道で言うと札幌、東北では仙台とか、東京だとか、名古屋だとか、大阪だとか。まあそういったような都市くらいしか残っていないと。都市らしい都市はね。日本全体が平板化してて、都市の中心性が薄れてきているんじゃないかということなんです。

「1.3」のところに「都市の定義」というのがあります。実は皆さん、学問的に都市とは何かと言った時に、そんなことははっきり決まっているんじゃないかと思う方がいらっしゃるかもしれませんが、意外にも定義がはっきりしないんですね。都市とは何かって、なかなか定義できないというのが学問上の今の現状だということなんです。

今日は後から私なりの定義というのをお示しします。ただその定義の中には、先ほどちょっと触れました都市と農村という対立における都市というものがあります。「都鄙論」というんですけれども、さっきも申しましたように愛知県では、農村そのものがなくなりつつあるから、都市そのものもなくなりつつあるという、そういった考え方なんです。つまり農村が無くなってしまったから都市そのものも消滅するという考え方です。この地域には人口30万以上の都市が3つもあるようです。豊橋、岡崎、豊田、すごいと思うんです。それから刈谷とか安城とかそれなりの都市があって、そういった意味で岡崎の都市性という個性が失われてしまったということです。ということはある意味で都市の消滅だというのが私の考えです。

## 2. 新しい「都市」の創造、つまり都市の活性化

次に「2」の「新しい『都市』の創造、つまり都市の活性化」に移っていきます。活性化とは、これもなかなか定義が難しいんですけれども、私はそこに書いてあるように考えています。読んでみますと「活性化とは、当該地域が、その『資源』を活かし、差別化された地域・空間となることである。その結果、住民は、同地域を誇りに思い、他の地域の人々にとっては、『行ってみたい、住んでみたい』地域となる。」こういったものが私の考えている活性化だということなんです。そこで差別化っていうのはマーケティングっていうか、商売をやっている人には分かりやすい言葉だと思うんですけれども、この中にはそういった言葉をあまり使ったことのないという人がいらっしゃると思うんです。「差別化」というのは、例えば岡崎なら岡崎が他の都市と違うんだといった違いのことです。違いがあることによって岡崎らしさが出るということだと思うんです。人間もそうだと思うんです。個性のない人と個性がある人を比べると、他の人と際違って違う人っていうのがやっぱり目立つわけですよ。そういったのが差別化なんです。今岡崎は岡崎と豊田と安城とどこが違うかということ、違いが段々薄れてきているということなんです。そこで差別化するために、岡崎らしさというのをどんどん作り出していくっていう作業が必要なんです。これが活性化の一番の重要なところじゃないかなと思うんです。ハンドアウトに「資源」と書いてありますけれども、何も無いところから作るということにはやっぱり無理がある。だからある程度今ある資源を利用してさらに岡崎らしさっていうのを作り上げていったらいいのではないかという考え方を私はしているわけです。

「2.2」の「新しい『都市』の創造」に移ります。そこに「『都市』とは」と書いてあります。今日の一つの目玉というか、私が一番考えたのはそのことなんです。「『都市』とは、時代の理想的な価値を具現化している卓越した空間」というのが私の「都市」なんです。過去の都市：宗教都市」と書いてありますよね。つまり過去の都市、例えば古代文明なんかの都市には神殿があったりすると思うんです。つまりその神殿というのは一番の中心なんです。ですから過去の時代の中心性、卓越性というのはそこに神殿があるというのが大事なことだと思うんです。今はどうかというと東京に行っ大きなビルというのはいろんな巨大企業の本社だったりすると思うんです。それから名古屋に行けばミッドランドスクエアっていうんですけど、ああいう所にはトヨタ

があると。今は経済が重視されている時代です。ですから当然それを象徴するような建物は巨大なビルということですね。岡崎で今巨大になっているのは、岡崎信用金庫で、全国でも非常に有名な信用金庫らしいけれども、やっぱり大きな本店ですよ。それから今、岡崎に、30何階というマンションが建っていて、ああいった建物が建ちつつあるということは時代が変わってきているということなんですね。違う中心性っていうか、違う価値観っていうのが重視されてきているということだと思っただけなんです。ですからその価値っていうのは時代によって変わるし、この21世紀の価値っていうのは何かということが問題になるということなんです。

私はそこで21世紀の都市は、公園・庭園都市というのが私の考えなんです。これが非常に重要なところなんです。私の考えで言うと、30何階建てのああいったマンションは、今はまだ時代の価値を具現しているんですけども、表しているんですけども将来的にはもう駄目になるかもしれない。昔は例えばこの辺にたくさんお寺があったと思っただけなんです。お寺は多分すごく輝いていたと思っただけなんです。今はもちろんある程度地盤沈下して、お寺の建物というのがビル群に埋もれちゃっていると思います。つまりお寺のやっぱり宗教的な価値というのが今の時代では残念ながらというか、時代の流れで希薄化しつつあるということだと思っただけなんです。だから時代の価値というのは建物とか、そういった景観っていうものに非常によく現れるということだと思っただけなんです。21世紀の理想的な価値というのは私にとっては、人間と地球に優しい生活というか、もう我々は自分だけの生活、中心市街地だけのことを考えるんじゃなくて、地球市民として地球や自然を考える時代になってきたし、多くのメディアからもそういったことを皆さんもひひしと感じているんじゃないかなと思います。21世紀の都市っていうのは先ほど申しましたように、公園・庭園都市というのが私の考えで、それは環境都市でもあります。つまり環境というものをよく考えて環境に負荷を与えないような、環境にダメージを与えないような生活をする都市っていうのが環境都市だと考えています。そういったようなものを我々は目指すべきじゃないかと思っています。

「2.3」に「中心市街地の活性化の岡崎市における位置付け」とありますが、つまりこの辺を活性化しようと考えた時に、中心市街地は岡崎市とどういう関係にあるかということなんですね。私はやっぱり康生地区の中心市街地は岡崎市全体のシンボルというか、象徴的な区域として扱うべきじゃないかと思っただけなんです。つまり岡崎市そのものというか、岡崎市の一番の象徴性というか、精神性というか、全てがここに凝縮されたようなものとして、この中心市街地を捉えるべきじゃないかと思っていますね。

次に「2.4」に移って、「岡崎市と愛知県の活性化」ですが、岡崎市も活性化しなくちゃいけないのに何で愛知県なんだなんてちょっと思うかもしれませんが。私の考えだと名古屋は非常に孤独で寂しい都市じゃないかというのが私の考えなんです。つまり名古屋は愛知県とか東海地区で飛び抜けた都市なんです。それに対して対立するものがないということなんです。というのは例えば朝青龍だけだったらつまんない。やっぱりそこに東西の両横綱があって面白くなる。皆さんだと栃若でしょうかね。私も栃若をちゃんと知っていますけれども、柏鵬時代に興奮した一人です。二人の横綱がいて、それで相撲が面白くなると思っただけなんです。それからこの辺だと徳川家康ですけども、

信長と家康と秀吉という3人がいるから家康の価値っていうのが輝いてきます。つまりもし家康だけだったら大して面白くないと思うんですね。3人の個性があって、その個性がまた別の個性を引き出すということがあると思うんですね。だから私たちは、家康を、多分そういった他の英傑との関係で見ていると思うんですね。もし家康だけだったら、家康のイメージはもっと違ったものになっていたと思うんです。信長みたいな人がいたから家康の個性というか、性格というのが際だって印象付けられている。また歴史家はそういうふうを書いてきた。そういった意味で、名古屋だけではつまらない。そこに対立する都市が必要だというわけです。昔は尾張があって三河の岡崎があったように、そういった対立候補というのが欲しいわけです。そうすることによって愛知県全体が活性化するんじゃないかと思います。皆さんもご存知のように東京の方だと「京浜」、東京と横浜というのがあって、実際に東京の人も横浜の人も相互に行き来していると思うんですね。それから関西に行くと「京阪神」ですかね、京都、大阪、神戸と、そういった違う個性の都市が近くにある、そこでお互いに個性を引き出しあっている。そういう関係があるんじゃないかなと思うんですね。

私としてはこの名古屋に対して岡崎っていうものが非常に差別化のある個性的な町にすることによって名古屋、岡崎、つまり「名岡」とかそういったような言葉が日本中に広がって、この地域っていうのが非常に輝いているっていうふうに見えるような、そういった地域になって欲しいなという願いがあるわけです。そういったことから岡崎市を活性化するということは名古屋を活性化するし、名古屋と岡崎が活性化することによって愛知県全体、ひいては日本全体が輝いてくると考えているわけです。

### 3. 提案：「中心市街地の歴史・景観資源を活かし、風格ある「公園・庭園都市」岡崎を創造する」

「中心市街地の歴史・景観資源を活かし、風格ある「公園・庭園都市」岡崎を創造する」というのが私の提案なんです。皆さんご存知でしょうかね。岡崎市のホームページをインターネットで見ると、将来都市像というのがあって、柴田市長さんがメッセージの中に「人、水、緑が輝く 活気に満ちた 美しい都市 岡崎」というのがあります。これが岡崎市の将来像だと。私は素晴らしいものじゃないかなと思うんですね。特に水とか緑っていう自然っていうものを考えているというところが私はいいんじゃないかと思うんです。

次に「風格」っていうところですけども、それなりの個性のある風格ある都市には立派な庭園があるんじゃないかなと思います。皆さんご存知のように金沢には兼六園、岡山には後樂園、水戸には偕樂園があり、岡崎には「楽園」っていうか、何かそういったものを造ったらいいんじゃないかと思うんです。世界には多くの庭園都市、田園都市、英語ではガーデン・シティというような言い方をしているんですけども、さまざまなガーデン・シティがあるわけなんです。日本の庭園都市では庭園都市の宣言をしているのが芦屋市なんですね。芦屋のお嬢さんっていう感じが皆さんイメージにあると思うんですけども、もしこの岡崎が庭園都市になったら皆さんのお嬢さんは岡崎のお嬢さんと、セレブという感じがするんじゃないかな。是非皆さん頑張って岡崎を品のある風格

のある都市にして欲しいと思うんですね。あと、庭園都市宣言をしているのかどうかちょっとわからないんですけども、さいたま市とか岡山市とか野洲市とか出雲市とか守山市、守山市は滋賀県かな、そういった都市が庭園都市を理想像として都市づくりを行っているということなんです。

海外を見ていくとそれなりの都市が庭園都市なんですね。カナダのピクトリアっていうのはガーデン・シティっていうことで非常に有名で、それからニュージーランドではクライストチャーチとか、ドイツではドレスデンとかポツダム、あとシンガポール、こういったようなのが海外の庭園都市でそれなりに知名度がある都市なんですね。ですから私としては岡崎がこういった公園・庭園都市になって、世界中の人々が、公園・庭園都市、岡崎を見に行こう、といったふうになって世界中からいろんな人が集まってきて欲しいと思っているわけでありまして。

#### 4. 中心市街地の資源について

「中心市街地の資源について」ということですが、じゃあどんな資源があるかっていうのが大事なんですね。この辺のことに關しては、皆さんの方が知っている場合もあるし、私のように余所者だからかえって、発見できる資源というのもあると思うんですね。ですから皆さんにとっては目新しいものがあるかもしれません。まず1番目、岡崎城を初めとした歴史・文化的資源、これは皆さん「知ってる」ということですよ。次がこれは意外に知らないんですけども、岡崎公園というのは日本で古い公園のひとつなんです。これはどういう意味かということ、明治のはじめあたりには、庭園はあったけど公園はなかったんじゃないかと思うんですね。つまり明治のはじめの辺りに西洋的な概念、西洋的な考え方の公園というものを取り入れて、公園をつくらうとしたわけで、今の岡崎公園辺りの空間に「公園」という名前を付けたようで、これは日本の公園史上、非常に早いということなんです。かなり早い方に属し、「さきがけ」なんですね。それから多くの神社仏閣は宗教施設ですけども、こういったものも後から申しますように歴史・文化的な資源であると同時に景観的な資源であるし、自然的な資源でもあると思うんですね。

それから次が、「景観・環境資源」で、乙川、伊賀川などの水辺資源がこれに入ります。皆さん最近韓国の大統領選挙があって、イ・ミョンバクっていう人が次期大統領に決まったことをご存知だと思うんですけども、彼がした大きな仕事のひとつに、清溪川(チョンゲチョン)という川の再生があります。これはどういうことかということ、元々ソウルには清溪川という川が流れていて、排水なんかで非常に汚くっていたということです。その上に高速道路を造っちゃったんですね。ところがこのイ・ミョンバクさんは高速道路を取っ払って美しい清流に戻したということなんです。これはすごいことですよ。高速道路を造ったら、それを取っ払うことになればものすごい反対があったと思うんですね。でも上手くそれが成功して、美しい清流が戻り、その清溪川の周りに、国際都市を建設しようと考えたようです。彼の構想では、その川をソウルが国際都市として認知されるためのひとつの道具立てとして考えていたようです。川というのは都市の中心的なシンボルになりえるし、それからそれによって環境がよくなるから人が集ま

ってくるっていう、そういったような非常に重要な力があるということなんですね。それをイ・ミョンバクさんが知っていてそれを実行したというのは恐るべきことだと思うんですね。ああいう人が大統領になってやっぱり韓国は変わるかもしれないと思っているんです。

我々にも多分その清溪川より立派な川があるんですね。それが乙川なんです。それから伊賀川も素晴らしい川で、素晴らしいのは中心市街地を流れているというのがすごいです。これが市街地から遠く離れたところを流れたって別に意味はないんですね。この中心市街地の名鉄の東岡崎駅のそばに乙川があるというのは、これはもうすごい財産なんですね。これを使わなきゃいけないというのが今日の一つのテーマなんです。

その次が、「景観の宝庫」ですけども、日本人の景観観を変えたと言われる人がいて、志賀重昂っていう人がその人で、岡崎の人なんですね。明治の時代に、明治の二大地理学書と言われている二つの立派な地理学の本があって、その一つがこの志賀先生が書かれた本なんですね。その志賀重昂先生、彼が日本人の景観観というか、日本の景観の考え方というのを変えるのに大きな力があつたということで非常に有名な人なんですね。そういった人がいる。そういった意味で、この街が景観というものを重視し、公園とか庭園を重視した街づくりと重なって、非常に皆さんが納得しやすいんじゃないかと思うんです。だから私は志賀さんをもっとこうアピールして大事にしたいなと思っています。

それから次の「景観・環境資源」として「乙川を挟む丘陵地」があります。丘陵地には坂があるんですね。坂というのは非常に景観でも大事だし、風情が出てくるんですね。この中には、多分カラオケなんかする人がいて、歌の中に坂が色々でてくるんじゃないですか。「女坂」とか、「無縁坂」とか。坂というのは非常に風格があるとか風情がある、そういったような景観なんですね。岡崎にはその丘があつて川がある。これは素晴らしい所だと私は考えているんです。

それからもう一つの「景観・環境資源」ですが、景観っていうのは、中にいて、中から見てもいいんですけども、外から見る事が出来るというのが大事なんですね。丘があるから、そこに登れば、そこから岡崎の乙川地域を見ることができるんです。つまりパノラマとして、広い展望として我々はこの地域を見る、景観を楽しむことができるということなんです。つまりこの地域全体が庭園なんです。それからそこに「窪地・入り隅」って書いてあるんですけども、あとからまたこれについては説明します。

次の「空間的資源」ですが、岡崎は、名古屋から30分の距離。これがすごいですね。つまり東京・横浜が約30分、大阪・神戸が30分、大阪・京都が30分、名古屋・岡崎が30分ということなんです。ひとつの個性的な町が、大きな街に吸収されずにギリギリ残るのはやっぱり30分ぐらいの距離が必要だと思います。だから岡崎というのはそういった意味で個性的な差別化ができる都市じゃないかと思うんですね。例えばこれが5分とか10分の都市だったら吸収されてしまうと思うんですね。そうじゃなくて30分という近からず遠からずという、そういった距離が非常に大事だということなんです。これを私は資源だと考えています。

それから次の「社会・経済的資源」として、岡崎には多くの支店とか営業所があると

いう点です。少し少なくなりつつあるようですけれどもまだ残っていると思うんですね。それから伝統的な店とか個性的な店も大事です。それからマンションが中心市街地周辺に集まってきていると思うんですね。それから別の「社会・経済的資源」があります。岡崎という石都というか石屋さんの町ですよ。そういった人がたくさんいる。そういった人のノウハウというのは大事じゃないかなと思うんですね。

それから「人的資源」。これがやっぱり大事ですよ。ここにおられる人は、私は資源じゃないかなと思っています。岡崎学を学ぼうという、そういった岡崎市の、筋金入りの岡崎市民がこれだけたくさん朝10時半から来るというのはおかしいんじゃないかと。私が年をとったら多分寝てますね。そういった筋金入りの市民がたくさんいらっしゃる点が大事です。

それから「研究・教育資源」として、岡崎高校をはじめとして付属中学とか、それから自然科学研究機構、昔の分子研って言われたものですね。このような教育、研究機関がある。そして研究機関とかそこに勤めている人というのはそれなりのレベルがあって、そういった人々は「人的資源」にもなるし、それから皆さんのお子さんとかお孫さんがそこに行って勉強できるとか、そういった素晴らしい環境がある。私が考えた資源、中心市街地の資源というのはこのようなものなんです。

## 5. 活性化の方針および具体案

次はそういった資源を元にして活性化を考えみます。5番の「活性化の方針および具体案」のまず1番「SMAP」ですが、これ皆さんご存知でしょうか。若い人は知っていますけれどもちょっと知らない人もいらっしゃるかもしれませんね。今年の紅白の、何でか知りませんが、紅組の方の司会を中居君がするようですが、それがSMAPのひとりなんですね。つまり歌のグループなんですよけれども、皆さんがご存知のNHKの大河ドラマの「新撰組」の主人公になった香取さん、あの人もSMAPの一員なんです。あと月曜日の夜なんか「SMAP×SMAP」とかそういったような番組があって、料理番組みたいなのがあって、あれがSMAPなんです。まあそれをちょっとひっかけてSMAPというのを考えたわけですよ。SMAPというのは何かというと「Shops, Mansions and Parks」の略で、これが活性化の重要な要素になるんじゃないかと思えます。Shopsというのはお店なんですよ。そこにオフィスを含んでShopsというふうに考えています。それからMansions、それから公園・庭園がParksと、この3つがこの辺の基本的な活性化の重要な要素になるというのが私の考えです。

次に2番目に「公園・庭園都市、岡崎」というところをご覧ください。ここをちょっと読ませていただきます。「『公園・庭園都市』の宣言を行う。」さっき申しましたように芦屋市なんかは全国に向けてそういった庭園都市宣言をしているんですね。やっぱり岡崎市も公園・庭園都市宣言をして欲しいなと思えます。「都市の中に公園・庭園を造るのではなく、公園・庭園の中に都市を造るといふぐらいの意気込みあふれる『公園・庭園都市』を造る」ということです。こういった公園・庭園都市におけるインフラ、インフラというのあまりご存知ないかもしれませんが、経済や産業においては、道路などの重要な基盤になるものをインフラと言うんですけれども、この公園・庭園都市

のインフラというのは、そういったものももちろんあるかもしれませんが、重要なのは公園とか庭園の木々とか川だとか、そういった様々な自然的なものがインフラ、基盤なんです。

3番として岡崎城、徳川ゆかりの地、乙川、伊賀川、丘陵、すでにある岡崎公園等の歴史・景観資源の潜在力を活性化して公園・庭園を造ることが重要であるというふうに考えることなんです。先ほどこういったものを資源として紹介しましたし、それを用いて公園・庭園都市をつくるんだと申しました。私は、3つの公園を考えています。一つはリバー・パークです。河川公園というんですかね。つまり乙川と伊賀川というのを中心とした公園にすることです。それからキャッスル・パーク、これ城址公園ですね。今の岡崎公園がそうでしょうね。だからほとんど、ある程度出来ているということなんです。新しく造るのはセントラル・パークです。セントラル・パークというと非常に有名なのがニューヨークにあるんですね。ニューヨークのマンハッタン島ですかね、そこに縦長の、非常に大きな公園があるんですけども、岡崎市にそういったものができればいいと思います。セントラル・パークとしては札幌の大通り公園なんかそれに近いんじゃないかなと思うんですね。私はもっと自然豊かなものにした方がいいと思うんです。名古屋にもセントラル・パークがあるんですけども、そこにもある程度自然はあるんですけども、岡崎はそれらを乗り越えるような素晴らしいセントラル・パークを造ったらどうかと思うんです。これにはお金がかかりそうですね。

4番の「石庭通り」ですが、石屋さんっていうか、石工っていうんでしょうかね。別院の辺りにお住まいになっているんじゃないかなと思うんですね。まとまって居住している石工さん達の各住居に個性的な庭園を造って、石庭通りというのを造ったらどうかと考えています。あとからちょっとひとつの例をお見せします。つまりそれぞれが独立してるんじゃないくて、そのもし一地域に一緒に住んでいるのなら、そこに自分の庭を石庭にして、ずらっと並べるわけですね。それが自然にショー・ウィンドウになるんですね。観光バスにそこを通ってもらって、「只今から左手に見えますのは岡崎の石庭通りです」とか言って、紹介してもらおうと思います。おおこれはなかなか素晴らしいといって注文が舞い込むんじゃないかと。絵に描いた餅かもしれませんが、すみません。そういうふうにショー・ウィンドウにするということなんです。ですから石屋さんというのが石庭のデザイナーになって欲しいというわけです、そういうような変貌をして、ますます岡崎を元気あるものにしてほしいなと思います。

それから「徳川庭園」。徳川の御三家は様々な庭園を造っているんですね。その中で尾張徳川は、江戸の尾張藩の下屋敷に戸山荘という広大な素晴らしい庭園を造ったそうです。戸山荘って非常に大きく、三島由紀夫さんが割腹自殺した自衛隊、その辺のところもそうだということです。それがもう無くなってしまっているんですね。たとえばその中の全ては岡崎に造ることができませんけれども、その一部でも造って、これは尾張藩下屋敷の有名な戸山荘の徳川庭園なんだということで、再現・復元したらどうかと思うんですね。そういった庭園を造ることによって岡崎の風格というのができるんじゃないかなと思います。だから金沢の兼六園とか、岡崎の戸山園とか何かそういったものを造ったらどうかということなんです。それから「神社・仏閣の庭園化」ということも

重要です。これはまた後からお見せしますが、ここの岡崎学でも龍海院さんの副住職の方がお話になったというんですけれども、そういった神社・仏閣も、京都の庭園のように、整備して楽しめると思います。宗教的なばかりじゃなくて、目で見て楽しめるような、そういったものにしたらどうかと思うんですね。

それから7番目「景観法」っていうか、景観条例ですかね、そういったものを制定して節度ある街を造って欲しいと思うんですね。

それから8番目「環境都市」。先ほど申しましたように公園・庭園都市というのは環境都市なんだと思います。この辺で環境を非常に重視しているのは安城なんですね。安城が環境都市宣言をしたんじゃないかと思うんですね。日本でもトップレベルの環境都市としてだんだん認知されつつあると思います。あとこの地域では、新城市もそうですよね。岡崎も少しは頑張っているんですけれども、もっとそれをレベルアップして欲しいなと思うんですね。それから皆さんがご存知の水俣なんか昔は、公害のイメージが強かったわけですが、それを払拭するように水俣も環境都市として頑張っているみたいですね。世界で最も有名なのがドイツのフライブルクっていう世界的な有名な環境首都というんですかね、そういったものもあります。ですから公園・庭園都市は環境都市というのも目指すということなんです。

9番の「風格ある都市」と書いてありますけれども、そういった公園・庭園都市ができることによって自然に風格ある都市が生まれてくるんじゃないかと思います。それからそういうことによって店舗が集積し、美しい住みやすいところということで、人々が増え、マンションができる。そのマンションができる時に教育機関も大事ですね。そういった様々な資源があるからマンションができる。ただ、マンションでも、色とか高さとか、そういったものを景観条例なんかで定めて節度あるマンション街を造ってほしいと思います。そうすることによって人が増えて、そういった人に合うような店舗が集積する、集まってくると思うんですね。ですから私が考えている康生地区の活性化というのは30年前とか40年前のような岡崎のイメージではなくて、もっと落ち着いた居住空間というのがもっと重視され、公園・庭園が重視されて、そこに店舗とかがあつちよってイメージが湧きにくいんですけれども、そういったものを考えているということなんです。

そうすることによって先ほどちょっと申しました「名岡」というものが誕生するわけです。名古屋・岡崎という関係が人々の頭の中に入るといことなんです。例えば、名古屋に住んでる人が、友人に「昨日、岡崎に行ったよ。」って言ったら、なんって返事するでしょうか。「何しに」じゃないですか。「なんで岡崎に？ 味噌でも食べに？」とか、「『きらら』のあそこに？」とか、まあ今なら少しはまだ分かるんですが、あと10年もすれば、「『きらら』って何？」って、多分忘れちゃって、何のために岡崎に行ったか、不思議に思われるんじゃないかと思います。でも、岡崎が公園・庭園都市で有名になれば、「あの庭を見に行ったの？」とかそういったような返事が出ると思うんですね。「岡崎っていいね」とか「綺麗な町だったでしょう」とか、そういったような会話が今は全然ないはずなんです。それがこういうことを通して名古屋の人から、そしてもちろん岡崎周辺の人も岡崎にそういったようなイメージを持って、そういった会

話が成立するような街じゃないとやっぱり活性化にはならないと思います。そうすれば皆さんもいいですね。「岡崎のお嬢さん」と言われて、品のある、風格があっちゃあ困るかもしれませんが、品のある素敵なお嬢さんというイメージができるんじゃないかと思うんですね。人間というのは住む場所ですよね。シロガネーゼとか言いますけれども、東京の白金台にいる人が素晴らしいようですけども本当にそうかどうか知りませんよ。でも何かこう「どこにお住まいですか?」「白金台」とか「田園調布です」とか言われる、とても立派な感じがしてお嬢さんも素敵だなと思います。それは嘘だとも思いますけれども、でも皆さんのように、こういった講演に、朝10時半から勉強しようとする方のお嬢さんとかお孫さんというのは素晴らしい人じゃないかなと思います。それをさらに景観・庭園都市によってレベルアップできるわけです。

それからその14番をちょっと見て欲しいんですけども、「21世紀の新しい都市像の提案」。これが先ほど言いましたが、非常に抽象的なんですけれども、今までの提案を実現することの意味は、環境の世紀といわれている21世紀における、新しい都市のありかたの提案であるということです。つまり新しい都市というのは、こういう庭園都市とか景観・庭園都市であるとか、環境都市といったものだということです。つまりそれが他のところと比べて、卓越した、その時代の価値っていうのを表している。21世紀というのは環境っていうのを配慮したそういう時代で、それをいかに人々にアピールするか、それがやっぱり中心市街地の役目だし、岡崎というか都市の役目じゃないかなと思うんですね。そういったような意味で、私は都市そのものっていうのはこうあるべきだということを岡崎が全世界に向けて、新しい都市像っていうのを訴えていく。そういったような力のある資源を持っている街が岡崎じゃないかなと思うんです。

ということで、あと15分ぐらいしかないので、映像を見ていただきます。これが先ほど話しました「公園」ですね。これが岡崎公園にあるのを皆さんご存知ですかね。隠れちゃって分からないかもしれませんが、結構大きく「公園」と書いてあるんですね。



岡崎公園内の石碑「公園」

それから次に、「4.3」のところでも神社仏閣の話をしてきましたが、宗教施設っていうのはひとつの異空間というか、ひとつのテーマ・パークと言ったら龍海院の和尚さんに怒られちゃうかもしれませんがテーマ・パークみたいなものですね。景観・環境資源として重要だし、安らぎの空間でもある。例えば、これは京都の永観堂ですね。これす

ごいんですね。テーマ・パークみたいで。これ滑り落ちたら怪我をしますけれども何かこういう「坂」というのは素晴らしい景観じゃないかと思うんですね。



永観堂（京都）

これは龍海院さん、この屋根素晴らしいですよ。これは庭なんですけれどもちょっと手入れをすれば素晴らしいと思います。裏の方に行ったことありますか。その裏に庭があって多分手入れすると素晴らしいと思うんですね。ですからこの龍海院は、東岡崎駅を降りてすぐのりっぱなお寺なんで、そこを活性化して欲しいなと思うんですね。それからお墓に行ったことありますか。素晴らしいお墓というか、うっそうとしていて夜行くと多分震えるぐらいのお墓じゃないかなと思うんですが、あのお墓は私はそのまま残した方がいいんじゃないかと。手入れはせずに。



龍海院



龍海院の裏庭

それから奥っていう空間ですが、皆さんお客さんが来ると「奥へどうぞ」と言ったりすると思いますが、まあ最近の家には奥はありませんけれども、日本人の感覚の中に奥っていう感覚があるんですね。奥っていう感覚を最近の若い人は知らなくなりつつあるんじゃないかなと思います。奥っていうものを人々に教えていくというか、奥のすばらしさというのを、奥深さっていうのを知らせたいなと思うんですね。その時に六所神社の所に奥があるんですね。伊賀川にも奥がある。これは六所神社の参道ですね。非常に奥っぽいところがあって、ただ整備が上手くいっていないようですね。地元に住んでい

る人に申し訳ないですけども、自動車の乗り入れを少し制限して、もっと参道らしくすると素晴らしく何度も行きたくなるような神社になるんじゃないかなと思うんです。今ちょっと残念ですよ。でもこれは非常に重要な資源じゃないかなと思うんです。



六所神社の奥

これは永観堂ですね、永観堂にはこういう素晴らしい奥があります。これは京都の高桐院で、ガラシャのお墓があるようで、紅葉が素晴らしいんですね。そこにこういった素晴らしい奥があるんですね。こういった奥というのは大事で岡崎の中にも造って行きたいなと思います。



永観堂（京都）



高桐院（京都）

それから窪地感覚。窪地というのは凹んでいるんですけども、そこに入ると人間というのは安らぎを感じるんですね。例えばここで私の講演をお聴きいただいている人達は前に座る傾向があって頑張っていますけれども、よく授業なんかで教室の隅に座る人がいますよね。あれは奥を求めているんですね。つまりそういう奥を求めてそこで安らぎを得るといことなんですね。皆さんのなかで押し入れが好きで押し入れに入る人もいるんじゃないかと思うんですね。うちの学生の中に、小さい頃ゴミ箱に入っていたという人もいましたね。だから皆さんのお子さんの中で、なにか下に潜ったりとか、隠れたりとかという人は、何らかのストレスがあるのかもしれません。そういった隠れる場所、自分の安らぎを得ることができる場所、それが窪みということなんですね。宗教的には非常に聖なる場所です。この辺では、乙川沿いの満性寺、それと竜美ヶ丘の三島小

学校は、非常に窪んでいて心地いい感じがしましたね。庭園で言うと、建築家はサンクン・ガーデン、つまり沈み込んだ庭というのがあるんですね。成功例としてニューヨークのロックフェラー・センターにそういうのがあるんだそうです。満性寺は、乙川の堤の所から見ると窪んでいて非常に何か温かい感じで、ぬくもりのある感じですよ。こういったものの中に入ることによって安らぎを得ることができるんじゃないかなと思います。これはあの名古屋のエンゼル・パークにあるサンクン・ガーデンというか、沈み込んでいますよね。このようにサンクン・ガーデンを人工的にも造ることもできるんですけども、その満性寺さんとかそういったものは実際にもうできているというわけです。それからセントラル・パークのところにもサンクン・ガーデンがあります。これは「入り隅」と言って道路に面して凹んでいるところがあるんですね。そこもひとつの窪地というか、そこに行くと安らぎを覚えるんですね。これは表参道のところにある喫茶店で、通りからずっと入っているところにあります。こういったところはなかなか穴場で落ち着くようなところがあるんですね。この写真は菅生神社なんですけれども、これももっと入り隅というか奥まったような感じを出せばもっと心休まる場所になるんじゃないかなと思います。



満性寺



エンゼル・パーク（名古屋）



エンゼル・パーク（名古屋）



セントラル・パーク（名古屋）



表参道の入り隅空間（東京）



菅生神社

乙川ってちょうどいい大きさだと、先ほど言いましたけれども、川というのは分断する働きもあるし、統合する働きもあって、乙川はどちらかというと統合する働きの方が強いと思います。圧倒的な大きさじゃあないもんですから親しみが持てるわけです。矢作川ぐらいになるとちょっと大きくてつき合いたくない感じですよ。つまり人と親和的というか、そういうのが乙川じゃないかと思います。パノラマ感覚というのはさっき重要だと言いましたが、いろんなところから景色を見ることができることが大事です。天橋立とか、そういうような景色を見ることができるというのが大事です。河川というのは、対岸方向に広い眺望、つまりパノラマを与えてくれるんですね。パノラマは非常に重要なんです。それから二つのパノラマがあって、乙川そのものを見ることが出来るパノラマと乙川の中から見るパノラマがあるということです。ですから市民が気軽にパノラマを楽しめるところがあるといいんですけども。愛知県か何かの合同庁舎でしたっけ。あそこには食堂があって、乙川の景色が非常によく見えて綺麗なんですね。観光バスが、観光客をあそこに連れて行って、そこで昼食をとるようにすればいいんじゃないかなと思うんですね。あのパノラマというのは非常に貴重だと思うんですね。これが合同庁舎から見たところなんですね。あまり写真がよくない、ガラス越しなんで映像としてはよくないんですけども、次の写真は、乙川の中から見ると対岸が綺麗に見えてくる。



見られる乙川パノラマ（合同庁舎より）



乙川からのパノラマ

それから、名鉄で名古屋方面から岡崎に入ってくる時に岡崎に着いたという感じを、皆さんは感じたことはないでしょうか。例えば川端康成の「雪国」の小説の中に入る時に「トンネルを抜けると雪国であった」という文章によって、違う世界に入っていき、という感じがすると思うんですね。天才的な川端康成はそういう仕掛けを作って小説を書いているんですね。岡崎にもそれがああるということなんですね。私はそれを「乙川玄関」といっているんですけども、どういう玄関かというところという玄関です。つまり名鉄で名古屋方面から岡崎に入ってくる時、乙川にかかっている鉄橋辺りにさしかかると、左手にこのパノラマ広がってくるんですね。これ素晴らしいパノラマですよ。これは本当に美しい。めったにこういう「玄関」で来客を出迎えてくれる都市というのはないと思うんですね。名古屋に入る時どうです。全然ないでしょう。名鉄で行くと地下に潜らされて怖いんですよ。そこにいくと岡崎はとても素晴らしいと思います。



「乙川玄関」

窪地感覚、さっき出ましたけれども窪地というのは非常に大事な感覚で、安らぎを覚えるということなんですね。乙川は、私は「二重盆地」と考えています。というのは、河床そのものが深いので、そこがひとつの盆地だし、それから竜美ヶ丘などの丘陵から見ると乙川周辺が盆地だということで二段構えの盆地だという意味で二重盆地というふうに考えています。

乙川周辺は、山野辺っていいですか丘なんですけども、丘の麓にあって水があるというそういった景観なんですね。乙川の河川敷から見ると中に入り込んだという感覚がある。これが「乙川盆地」、私が名付けたんですけどもね。それからこれは、景観の宝庫なんです。このことに関して、景観論で有名な樋口先生が、次のように書いています。「盆地の景観であろうと、谷の景観であろうと、平野の景観であろうと、その山野辺にこそ、日本の景観の原型が一つのセット、まとまりとして存在していたのである」（樋口忠彦、『日本の景観』、ちくま学芸文庫）。この乙川周辺は日本の原型的な景観の宝庫だと思います。つまり、こういった丘陵のすぐそばというのは、私たちに安らぎをあたえてくれるんですね。さっきの窪地に近いような感覚があって、そういった景観というのは景観の宝庫なんです。だから私の考えだとこの中心市街地のこの地域は景観の宝庫なんだということなんです。窪地の心理学的意味というのはさっきちょっと言ったんですけども、人間の腕ってこういうふうになっていて、赤ちゃんを抱くときの腕の

中で、赤ちゃんは多分安らぎを覚えるんじゃないかと思うんですね。それを母性原理っていうふうに考える人もいるみたいですね。



「乙川盆地」

それから乙川というのは緩やかな蛇行をしていて、ゆったりと心地いい湾曲をしていることに皆さん気がついたことがありますか。真っ直ぐだとつまらないですね。やっぱり人間は、人生紆余曲折というか、こう何かあったほうがいいと。これが乙川メロディーです。

次が乙川のリズムで、景観の中にもリズムが必要だということですね。乙川の橋桁が、心地よいリズムをきざんでいます。何かものを造るにしても、リズム的な物をつくるか、何かそういった景観の中にリズムを入れると非常に楽しい景観というのができると思います。



「乙川メロディー」



「乙川リズム」

次に「乙川岬」を紹介します。多分皆さん感じたことがないかもしれませんが、岬感覚っていうんですか、その突端に行くとそこに何か自分が開放されていって微妙な独特な感覚があるんですね。そういった岬感覚っていうのは大事なんですね。歌謡曲にもありますよね。「襟裳岬」とか「宗谷岬」とか、それから石川さゆりさんの「津軽海峡冬景色」にでてくる竜飛岬とか。岬っていうのは何か、非常に風情がある。そういったものも岡崎にあるんだということです。これちょっとこじつけなんですけれども、これが私の見た「乙川岬」です。写真の右の方が乙川で、左の川が伊賀川です。その合流点

がちゃんと岬になっている。素晴らしいと思います。一人たたずんでいますね。この人は「岬」であることを知っているんですよね。知っているというか岬感覚を知っているんですよ。だからああいう所にいるんですよね。ビールか何か、お酒でも飲める所を造ると素晴らしい。



「乙川岬」



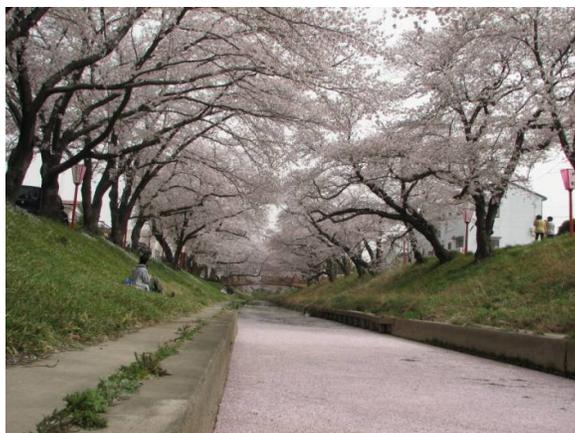
「乙川岬」にたたずむ人

乙川の水が少ないのがちょっと難点ですね。乙川でも昔は、水遊びをしたんでしょうかね。この辺に住んでた人はしたかどうか知りませんが。泳いでました？今はとんでもないですね。「大正時代は。」この写真では、お孫さんと遊んでいるみたいですね。伊賀川でも泳いでいた、泳いでいますか。ああなるほど。



乙川での魚とり

今度は伊賀川です。伊賀川は、桜の頃は素晴らしいですね。この写真のように、桜のトンネル感覚を味わうことができるので、「伊賀川桜トンネル」って思っています。何で、川面一面に桜の花びらが、敷きつめられているのかわかりませんが、一面に敷きつめられていて、人工的に作っているんでしょうかね？誰かが。自然に？素晴らしいですね、やっぱりね。何で多くの皆さんが岡崎公園の桜を見に行くのか不思議ですよ。こっちのが絶対いいと思いますよね。えっ、個人の方が。残されたスポットですね。



「伊賀川桜トンネル」

次は高所感覚。これは吉祥院から撮った写真で、あそこは、崖のところで展望台としてはあまりよくないんですけども、こういうパノラマを見るところがありました。こういったものをもっとたくさんつくって、岡崎の中心市街地を見る場所というのを設定したらどうかと思います。



吉祥院から見たパノラマ

坂というのはまたすごいんですね。文学にも様々な坂が出てくるし、歌謡曲にも坂が登場しますよね。文豪の永井荷風が「坂というのは平地に生じた波瀾である」と難しいことを言っています。岡崎は坂の町ですよ。だから例えば岡崎の坂20選とか言って、美しい坂を20集めてみたらいかがでしょうか。そうしたら、みんなが坂の美しさ、風情というのを意識するようになると思います。この写真は、中心市街地じゃないんですけども、滝団地の近くの坂です。私は「滝坂」って名付けたんですけども、ここは素晴らしいですね。岡崎の全貌を見ることができ、ここはいい所ですよ。交通事故にならないようにしてくださいね。これが「モダン坂」ですけども、坂の美しさを引き出す演出をすれば、もっといい坂になるはずなんですよ。モダン通りのところは立派な坂として再生できるんじゃないかと思います。次は、これは会議所通りのところの坂で、

私、結構これ好きなんです。紅葉みたいなのがあって、非常に風情のある所で、こういったのは「会議所通り」なんて名前よりも何かもっと別な名前にして、デートを楽しめるような場所にしてほしいなと。次の坂は、「葵丘坂」です。すぐその東岡崎駅の南側の葵丘会館。そのちょっとした坂なんですけれども、これ素晴らしいと思ったんで、紹介します。そこに様々な石が置いてあって、石の配置なんかも素晴らしくて、私はここが素晴らしいなと思っています。次の写真は、京都の三年坂で、坂っていうのはこういうふうに観光スポットになるところなんですね。こういったような利用が全然岡崎ではなされてないということです。次は、東京の表参道ヒルズで、建築家は建物の中に坂を取り込んでいるんです。坂を建築の中に取り入れたわけです。



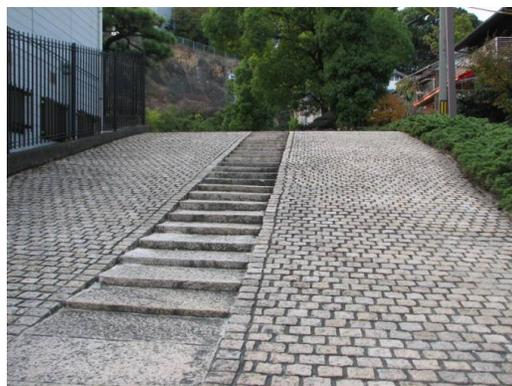
「滝坂」とパノラマ



「モダン坂」



会議所通りのカーブ・坂



「葵丘坂」



三年坂（京都）



表参道ヒルズ（東京）

次は石庭です。先ほど石庭を造れば良いという話をしました。次が、京都の東福寺の石庭です。石の加工で言えば、随念寺にこういった写真のものがああります。これ石ですよ、多分。これなんか素晴らしいと思います。そして、これは随念寺さんの納骨堂が何かの扉でしょうかね。次の写真は、先ほど石庭のショー・ウィンドウという話をしたときに紹介した家がここです。これが別院のすぐ目の前のところにある石屋さんかな、よく分からないんですけども、そこに非常に簡単な石庭があって、とても素晴らしいと思います。こういった石庭を、それぞれの石屋さんがずらっと100メートルか200メートル同じように造ったらこれは素晴らしい通りになるというふうに私は考えています。



東福寺石庭（京都）



随念寺



随念寺



別院前の石庭のある民家

先ほど白金台について話しましたが、白金台そのものは「台」とつくから丘なんですね。そのため坂がたくさんあったり、それからそういった町には緑があったりするんです。残念ながら緑の所は撮ってきませんでした。白金台には緑があちらこちらに生えていて、街路樹がすごいんですね。この写真は表参道の通りなんですけれども、表参道の街路樹もすばらしいんです。立派な木がずっと連なっているんです。ところが岡崎には、少ないんですね、こういうのが。これに近いような形のものをたくさん造ったらどうかと思います。そうすることによって、公園・庭園都市になって、素晴らしい岡崎ができ

あがるんじゃないかと思っています。ということで時間になりました。ご清聴ありがとうございました。



白金台の坂と緑



表参道のゆるやかな坂と街路樹